

「人情簿」から見る中国江南小城镇社会の人間関係 浙江省寧波市象山縣丹城鎮を事例として

研究目的

小城镇を対象とする社会人類学の研究と言え、有名な費孝通の「小城镇理論」があり、主に小城镇を農村の政治、経済、文化の中心地と位置付けて、農村の経済発展における小城镇の役割に重点を置いて展開されてきた。ほかに、周辺農村の集散地という小城镇の一側面を考察する研究も見られる。しかし、都市でもないし村落でもない小城镇社会についての研究は意外に少ない。そこで、本報告では、2万以上もある中国の小城镇の一つ 浙江省象山縣丹城鎮を対象とし、紅白喜事の「人情簿」を通じて、小城镇社会の人間関係を明らかにしていきたいと思う。

- 一、象山縣と丹城鎮の概要
- 二、「人情簿」と「人情簿」の変化(1963~2001)
- 三、人生儀礼において親族と親戚の役割
- 四、個人的ネットワークの重要性
- 五、「人情簿」からみる「人情」交換の基本原則

一、象山縣と丹城鎮の概要(資料1の地図を参考)

1、象山縣の概要

面積：象山半島と周辺608余りの島々。陸域面積1175 km²。
 人口：535,166人¹。(2001年現在)
 方言：吳語寧波亞方言

2、丹城鎮の概要

面積と人口：行政面積は82 km²。城区面積は5.5 km²。人口は85,837人。
 主要産業：建築、紡織、服装、工芸、食品など20業種にわたる820社の企業。

3、調査対象

象山缸廠²。前身は1962年に創設の丹城鉄業合作社。70年代の始めに汽車配件廠に変身。85年に現在の名称。中国汽車零部件公司の配下。寧波市の重点企業の一つ。従業員450人、内エンジニア50人。資産総額2800万元、敷地面積20,000平方メートル。
 調査対象は1970年前後に就職した従業員たちを中心にしたものである。

二、「人情簿」と「人情簿」の変化(1963~2001)

1、人情と「人情簿」

人情：「送人情」、「跟人情」、「収人情」、「還人情」の別がある。地元ではお祝いなどを贈ることを「送人情」または「跟人情」、それを貰うことを「収人情」、還すことを「還人情」と呼んでいる。(2000年一年間の「送人情」の内訳とその総額は資料2を参考。)

¹ 象山縣第五次全国人口普查办公室からの聞き取り調査。以下同。

² 企業の株式化のため、今は集団所有制企業から私営企業への転換の最中である。

「人情簿」: 紅白喜事が行われる際の贈り物を記録する帳簿は「人情簿」と呼ばれる。主に結婚式と葬式に作成。結婚式の場合は「親迎」の日に、葬式の場合は「出殯」の前日いわゆる「正日」に、「庫房」を担当する人が筆で記録する。これを「上人情」という。(資料1の下の写真を参考)

2、「人情簿」の変化(1963～2001)

高額「送人情」の親族(結婚式)

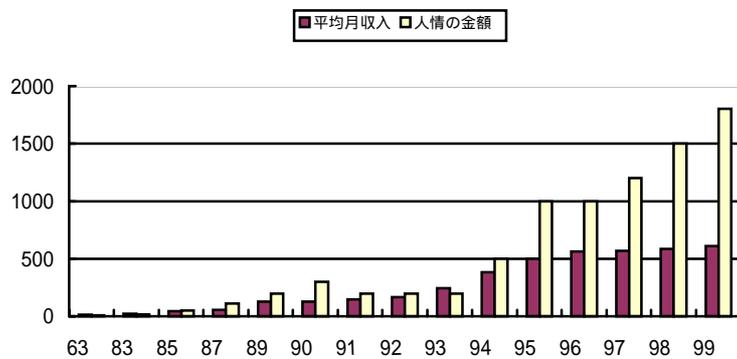
ア: 最高額「羊酒」³は姐妹夫から

イ: 父方の伯父叔父、姑父と母方の舅舅と姨父から

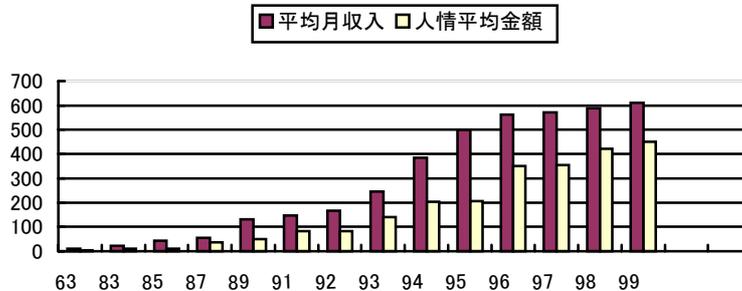
ウ: 「表羊酒」は父方と母方の堂姐妹夫と表姐妹夫婦から

A、金額の急増

グラフ1: 父方オジと母方オジが送った高額「人情」と一人当たり月収との比較(結婚人情)



グラフ2: 一般関係が送った人情の金額と一人当たり月収との比較(結婚人情)



注1: 一人当たりの月収データは『象山県志』と『象山統計年鑑』(91～95、96、97、98、99)によるもの。

注2: グラフ1は最高額「羊酒」を除いた。

説明:

人情金額において、親族・親友は1963～1983年の間に10～20元。その以外の関係は5～15元。両方の間にそれほど違わなかった。85年以降、両方とも急増した。特に親族・親友の方は急増度合いが大きい。

1987年以前、丹城鎮住民の一人当たりの年収は全国平均より低かったが、87年以降、全国平均を

³新郎が、婚出した姉妹の夫から貰う「人情」のこと。最高の金額に肌着と洋服。昔は一匹の羊と一担ぎのお酒を「羊酒人情」と呼ばれていた。『史記』には、「羊酒」を持って挨拶するという話がよく出ているが、それとは関係があるかどうかは判断できない。姉妹夫が「羊酒」を送ることは地元の古くからの習慣らしい。また、「表羊酒」は表姉妹の夫からの「人情」。

超えた。全国 1999 年の城鎮居民家庭一人当たりの可支配收入は 5,854 円で、象山県の城鎮居民の場合は 7,325 元だった。

B、「人情」の現金への転換。(資料 3 を参考)

「送人情」において、昔は物品、現金、労働力。現在はほとんど現金。

昔は「送生姆」、「対周」、「新築」、「探病」、「做寿」の「送人情」がほとんど食品類に占められ、「結婚」も半分以上物品。84 年以降は、新築、結婚などの「送人情」が現金へ移行。94 年以降はすべての「送人情」が現金になった。

原因分析：

：80 年代までは、社会主義計画経済の下で日用品は「票（配給券）」で買う時代だった。社会交換の視点から見ると、物資が乏しい時に、品物で「送人情」することは人々が助け合って人生儀礼を行う意味を持つ⁴。

：近年、紅白喜事の市場化へ。葬式は殯儀館⁵で、結婚式はホテルで行う現象が増えてきた。「忙」という親族・近隣の手伝いが減るようになった。

C、「送人情」種類の増加と各種類「人情」金額の接近

：「上大学」のお祝いは 90 年代から見られるようになった。「做寿」は昔親族などごく小さい範囲で行っていたが、いまでは、盛大になってきた。

：「送人情」の相場として、「結婚式」が一番高かったが、現在では、ほかの「人情」の相場が「結婚式」のそれとあまり変わらない。

三、人生儀礼において親族の役割

1、結婚「人情簿」から見る親族の役割

A、新婚夫婦への経済的援助

丹城鎮では、結婚「人情簿」をみる限り、結婚時点から両親から経済的に独立している事例が多い。

表 2：

「送人情」側と「収人情」側	親族	両親の同僚・友人	自分の同僚・友人
両親			
新郎新婦(自分)			

注 1： は貰うこと、 は還す必要があることを示す。

注 2：丹城鎮の若者は就職してから、同級生、同僚などの「人情往来」が始まる。

結婚してからは親族との間も含め、すべての人情往来が始まる。

両親が貰う「人情」を結婚宴会代⁶、コック、お手伝いさんなどへの謝礼、タクシー代などの雑用に使う。両親の経済事情によって、親族から貰った「人情」の全部か一部かを新郎新婦に渡す。

親族(ごく一部の両親の親友も含め)から新郎には「押袋」⁷、「圧袋」または「捏手」、新婦には「送嫁」と呼ばれる現金を直接に新郎新婦に渡す。(資料 4 を参考)「押袋」と「送嫁」は還す必要がない。新郎新婦への経済援助と見ても良い。

⁴ 閻雲翔が凶作時期における贈り物交換の役割を強調した。ページ 87。

⁵ 葬儀場

⁶ 新婦側は「親迎」の日のお昼に「新郎酒」宴会を開く。新婦側のすべての親族と友人が参加する。新郎側は「親迎」の前夜に「網酒」、当日の晩に「結婚酒」また「人情酒」という宴会を開く。一般的に「親迎」前後、宴会が三日間続く。

⁷ 「押袋」、「捏手」は結婚時、上の世代から直接に新婚夫婦へ渡す金銭のこと、経済力の代々伝わる願いが込められている。

また、新郎新婦に渡す現金は「送人情」の親族の要求で「人情簿」に載せないケースが多い。それは親族から明白に、還す必要がないことを表明されたと見て良い。

事例：1998年、史 が結婚した時、母オジから1000円の「人情」を貰ったが、「人情簿」には500円と登録している。史 の両親の経済事情と将来の「還人情」のことを考慮した上で、母オジがそう要求したのだという。

「押袋」、「捏手」の他に、「茶礼」⁸も経済的援助。

結婚前に同居するカップルが増えてきて、結婚する際、カップルは積極的に親や親族から経済援助を得ようという動きが見られるになった。

事例：石女：「周さんの父親がお金がないから、聘金を出すのは周さんですよ、聘金を免除してくれないの。」

石母：「今月の生鮮食品は高いよ、結婚宴会代だけでも1万円かかりそう、免除はできない。」

石女：「じゃ、いくら減免できるの」

石母：「そうですね、半分でいい、5000円はどう」

石女：「じゃ、5000円で」

石母の話によると、親族からもらった「人情」すべてを娘の要求で娘に渡した。その母親が娘のことを「精明」（計算高い）と評価した。

葬式「人情簿」を見てみると、結婚「人情簿」のように、高額の「人情」があまり見られない。親族でも一般友人関係でも、「人情」の金額がほとんど同じのである。結婚「人情」の新婚夫婦への経済援助の役割が伺える。

B、結婚「人情簿」から見る親族参加者の範囲

、「五服」より小さい。三代以内を中心に、四代まではあるが、五代まではごく稀。（資料5を参考）

父方の親族は伯父叔父を中心に、それより上は祖父母まで、たまには祖父または祖母の兄弟姐妹も参加するが、ごく稀である。父方の堂兄弟姐妹と表兄弟姐妹とそれらの子供達が参加する例もあるが、稀である。つまり、一般的には祖父母の直系子孫（婚出した女性たちも含め）は「送人情」の父方の親族範囲である。

父方親族	名称
上三輩	
上兩輩	祖父祖母、祖父の兄弟姐妹、祖母の兄弟姐妹、祖父の堂兄弟夫婦、祖父の表姐妹夫婦（稀）
上一輩	伯父伯母、叔父叔母、姑姑姑父、父の表兄弟表姐妹夫婦、父の姨表兄弟姨表姐妹夫婦、父の堂兄弟堂姐妹夫婦、父の姑表兄弟姑表姐妹夫婦
自己	堂兄弟堂姐妹夫婦、姑表兄弟姑表姐妹夫婦

、母方の親族参加者が父方のそれとほぼ同じ。

母方の「送人情」の親族範囲は父方のそれとほぼ同じ。母方の舅舅と姨父を中心に、外祖父母まで上るのが普通である。外祖父、外祖母の兄弟姐妹とその子供達、つまり母方の堂兄弟姐妹と表兄弟姐妹が参加するのが稀であるが、Egoの表兄弟表姐妹がほぼ全員参加する。

母方の親族以外に、義理の兄弟姉妹（嫂子、弟 婦、姉妹夫）の親族、その父や兄弟たち、婚出した姉妹たちなどの参加者が多い。

⁸ 「茶礼」：「親迎」の「結婚酒」が終わったあと、新郎新婦が砂糖入れのお湯を新郎の親族に「献茶」をする。親族が「献茶」を受け取って、現金の入った「紅包」を渡す。

母方親族	名称
上三輩	
上兩輩	外祖父外祖母、外祖父の兄弟姐妹、外祖母の兄弟姐妹、外祖父の堂兄弟夫婦、外祖父の表姐妹夫婦(稀)
上一輩	舅舅舅母、姨娘姨父、母の表兄弟表姐妹夫婦、母の姨表兄弟姨表姐妹夫婦、母の堂兄弟堂姐妹夫婦、母の姑表兄弟姑表姐妹夫婦
自己	表兄弟表姐妹夫婦、姨表兄弟姨表姐妹夫婦

注：親族と親戚についての地元の諺に「一代親，二代表，三代全勿曉」と「新親熱別別、老親掛板壁」がある。

結婚「人情簿」から以下の三点が指摘できる。

(1)結婚者の男女別に関わらず、親族の参加者がほぼ変わらない。「送人情」の金額はその年の相場により決める。(資料6を参考)

(2)金額からみると、父方の伯父叔父と母方の舅舅姨父の「送人情」金額はほぼ同額、しかも、父方の伯父叔父と母方の舅舅姨父を中心に、上へ、または下へ遞減して行く。

(3)祖父母と外祖母世代の「送人情」について、夫婦別で贈る例が多いが、その「人情」が「人情簿」には必ず記録されるが、還される例が多い。それは、中国の伝統論理「孝行」と「上下尊卑」とに関わりがあると思う。

C：母オジの姉妹の息子(舅舅對外甥)に対する地位についての再考(資料6を参考)

結婚「人情簿」から、舅舅の特殊な地位が見られない。

お産祝いの「人情簿」からも、同じことが言えよう。

「羊酒」と「新阿舅」について

「新阿舅」：結婚式の「親迎」当日、新婦の兄弟が「新阿舅」と呼ばれる。「新阿舅」の役目は

ア：「親迎」当日の昼に、新婦側が開く「新郎酒」宴会で、「新阿舅」は新婦側の代表として、新郎とその「伴郎」たちと同じテーブルで食事をする。それは新婦側の親族の「イジメ」から新郎を保護するためでもある。

イ：新婦が「上轎」する際、「新阿舅」が新婦を抱いて「上轎」する。

エ：新婚三日後、「新阿舅」が「回娘門」するよう新婚夫婦の家へ呼びに行く。

「新阿舅」はこれから誕生する「外甥」の立場からの呼び方だと解すると、舅と外甥の特殊な関係が伺える。その上、姐妹夫から姐妹の兄弟への「羊酒」人情も、特別な意味を持っているのも考えられる。「妻の貰い手」から「妻の与え手」への償いか、自分の子供つまり、「外甥」に代わって、「舅舅」への挨拶がワイロか。また、娘婿の立場から見ると、「半個兒子」という言い方があるように、妻の「実家」、いえ、妻の親族への役目が大きいことも考えられる。(ここでは、娘婿についての考察は省略する。)

母オジについての結論：結婚「人情簿」からは母オジの特殊な地位が見られないものの、結婚式、「羊酒」などを通して、昔の母オジの役割が伺える。母オジの役割が変容してきたのではなからか

2、葬式「人情簿」から見る親族の役割

(1) 葬式「人情簿」から見る親族参加者の範囲(資料5の下の部分を参考)

(2)葬式「人情簿」と結婚「人情簿」との比較

A：高額「人情」と一般「人情」の差がそれほど高くない。

「同輩」親族と下の世代の親族(夫方と妻方両方含め)は一般関係よりやや高い「人情」を贈る。しかし、金額の一般関係との差は大きくない。親族の「人情」は二部分に分けられる。現金と死者への供え物。

供え物：蠟燭、爆竹、線香、「重被」⁹、「花圈」(花輪)、毛布、「貼心被」、「背後被」など。

葬式「人情」は「喪飯」という宴会代、コックとお手伝いさん、「鬧喪」グループ、道士和尚などへの謝礼、雑用などに使われる。

表 3：

死者との関係	重被	背後被	貼心被と肌着
死者が男性	外甥、外甥女、姪女、妻方の外甥女、姪女	姉妹	娘
死者が女性	外甥女、姪子、姪女、夫方の外甥女、姪女	兄弟	娘

B：葬式の参加者が結婚式の参加者よりずっと多い。(植野弘子の台湾の事例とは逆)

結婚式に参加するかどうかは、「送人情」側と「収人情」側の両方の操作によって決められる。(詳しくは後ほど述べる)、しかし、葬式はたとえ遺族から直接に知らせが来なくても、訃報を知った以上必ず参加しなければならない。

事例：定年退職した夫婦は元の同僚が亡くなったことを耳にした。その月、その夫婦は何回も「送人情」したので、お金の工面に困っていて、ほかの元同僚の家へ相談しに行ったが、逃げるのがよくないと言われた。結局、借金して「送人情」することにした。

C:死者への「送終」と供養が重視され、葬式儀礼における父系直系親族の役割が大きい。

「麻衣」を着る親族：息子とその家族達、娘(婚出した娘も含む)

「騎紅」¹⁰する親族：娘婿、娘と息子との婚約者、外甥、外甥女。

「家祭」：息子とその家族による死者への供養。

「堂祭」：死者の姪子とその家族による死者への供養。

「路祭」：婚出した娘とその家族による死者への供養。(出殯途中)

他に、「七七」供養。家で直系親族より行われる供養だが、「四七」と「七七」は娘夫婦がその費用を出す。

四、個人的ネットワークの重要性

結婚、葬式、新築などの「人情簿」を見てみると、同僚と友人の数が圧倒的に多いことが分る。「羊酒」を除く、親友の高額「人情」が親族(父方オジ、母方オジ)のそれよりも高いことが多い。

親族以外の関係：同僚、同級生、友人、隣り近所、擬制的兄弟姐妹関係など。

1、「工作单位」の役割：「同志」関係の重要性

、「工作单位」が「集体」の名義で結婚式や葬式への参加。

事例：「昔、老廠長はよく私達を連れて、皆で工廠のトラックに乗って「葬式」に参加したものですよ。」

、参加者の中に、同僚が大部分を占めている。

(1)、同僚関係は個人的なものではなく、家族グルミの付き合いで、広がる可能性が高い。

⁹ 棺桶に置かれる布団のこと。死者との関係によって、呼び方が違う。「背後被」は敷き布団のこと。「貼心被」は文字通りに心に一番近い所に掛けられる掛け布団のこと。「背後被」、「貼心被」は必ず掛けられるが、布団の数が多ければ、「重被」は一枚だけにする。でも、死者には布団の贈り手を一々報告する。

¹⁰ 出殯日に着る「孝服」の一種。紅い帯を肩からつける。「騎紅」する人たちは出殯行列の先頭に立って歩く。順番としては、一番先は位牌を持つ娘婿、その次は紙銭など持つ外甥、外甥女など。

例えば、AさんとBさんが同僚で、A家とB家が仲がいい。B家親族の紅白喜事をA家が参加する、A家親族の紅白喜事をB家も参加する。友人、近所などの関係について、同じことが言えるが、同僚関係の方が目立つ。

(2)、在家信者のネットワーク、民間貸借活動「入会」など、同僚関係が十分に活用される。

、師徒、師兄師弟関係の重要性

親族以外、高額「送人情」するのは、親友、徒弟、師兄師弟、擬制的兄弟または姉妹関係。親友は同時に同僚であることが多い。師匠と徒弟は上下関係であるため(拜師儀礼が盛大であった)、徒弟から師匠への貢献が大きい。また、師兄師弟関係は普通の同僚関係より親しい、それらの関係は擬制的兄弟関係とよく似ている

2、擬制的兄弟また姉妹関係

擬制的兄弟また姉妹関係は「結拜兄弟」、「結拜 妹」、または「兄弟家」、「 妹家」とも呼ばれる。

事例：張 とその妹が結婚した時に、父の十人の「兄弟家」が参加し、高額の「人情」を送った。

乳母の関係で、乳母の子供たちが乳子の兄弟姉妹のことを兄弟姉妹関係と同一視する事例もある。また、養子(香火継承のためではなく)とその養父母の家族の関係も同じことが言える。互いに「哥哥弟弟、姐姐妹妹」と呼んでおり、「人情」も「羊酒」を除く、同じ金額を送っている。

特殊な事例：尼姑が「送人情」することがあった。

3、隣り近所

隣り近所が新築する時、「好風水」が盗まれないようにいろいろと工夫をしたり、隣り近所に死者が出た場合、魔よけなどをしたりすることがあるが、隣り近所は無視できない存在である。日常的に食品類の交換が頻繁に行われ、いざという時互いに手伝えることがよくある。何回を引越しても、昔の隣り近所との関係は保たれる。

4、父母世代より、若者の個人的ネットワークが広がっている。

父母世代は地元で教育を受けただけで、大学へ行くチャンスに恵まれなかった。彼らの個人的ネットワークは親族と工廠というコミュニティーに止まるところが多い。その上に、厳しい戸籍制度が人口の流動を制限した。現在では、多くの若者が大学へ行ったことがあり、全国各省で友人を持っていても不思議ではない。90年代から、戸籍制度¹¹が緩めたため、他の地方で仕事を持つこともできるようになった。

五、「人情簿」から見る「人情」交換の基本原則

1、「礼尚往来」の互惠(互酬)原則(reciprocity、the principle of give-and take)

「人情簿」には品物の材料など細かく書かれている。材質によって値段が違うから。

A: 「人情」を贈ることには「送人情」と「跟人情」(随礼)の別がある。

「人情」を還すことには「還人情」と「還人情債」の別がある。

「人情」を受け取ることは「収人情」と呼ばれる。

「人情」交換についての「表達性」、「義務性」(閻雲翔、1998)

B: 「還人情」する際、その年の相場と「人情簿」を参考にして、やや多めに還するのが一般的原則。

C: 「収人情」側が亡くなると、その妻か息子が代わりに「還人情」する。

「父債子還」原則? 「人情」は家庭の間の付き合いであって、個人的ものではないことを示す?

D: 「羊酒」と師徒など「上下」関係以外、高額の「人情」を送らない。

¹¹ 上海で投資するか、家を購入するなどの条件で上海の「藍印戸口」を与えられる。なお、2001年10月1日より、小城镇戸籍制度の改革が正式に実施された。これにより、固定の住所と一定の収入さえあれば、農村の人々が小城镇戸籍を持つことができる。

お互いがいくら親しくても、「収人情」側の経済力、将来の「還人情」問題などを考慮した上で、「人情」を控えめに贈るのが一般的原則。(特に自分にはまだ未婚の子供を何人もいるのに、「収人情」側には子供がすでに結婚した場合)

2、互恵原則と「上下尊卑」秩序との衝突

A:親族の「人情」交換において、「輩」によって「人情」の金額が決められており、例外があまり見られない。「輩」が高いほど(結婚の場合は上の一世代より)、あるいは低いほど「送人情」が低い。
B:师徒関係など「上下」関係において、「下位」に立つ方が高額な「人情」を贈る例が多い。
ほかの事例：新年の挨拶周りは小輩、晩輩からお土産を持って「長輩」へ挨拶に行く。新年に、友人の家へ遊びに行っても、もしその友人が両親と一緒に住むなら、かならず手土産を持っていかないと失礼なことになる。新年に小輩、晩輩から「長輩」に「孝敬銭」を渡す。
祖父母輩から贈ってきた「人情」は還される例が多い。(走後門、拉關係)

3、「人情」交換に対する操作

A:紅白喜事がある度、親族には必ず知らせること。

事例：林の母親がその兄弟との喧嘩で、二つの家庭が三年間付き合うことがなかった。しかし、1992年、林家の娘が結婚することになった。母方オジに知らせるどうか、家族全員が悩んだ末、知らせることにした。結局、母方オジの家族全員が参加しにきた。それをきっかけに、二つの家庭が仲直りした。

B:親族関係以外、知らせるかどうか、「人情」を受け取るかどうかによって人間関係を操作する
紅白喜事がある度、親族、友人などに知らせることが常識。言い換えれば、知らせないことによって、相手との関係を断つことができる。

事例：AさんとBさんが元の同僚関係で、二年間二人の関係が冷めた。Aさんの息子が何日に結婚するという噂を聞いて、Bさんはその日にわざわざ出かけずに家で待っていた。Aさんからの知らせがこなかった。AさんもBさんがくるかこないかに賭けていた。結局、そのきっかけで二人の関係が断った。

「人情簿」に「退」(還す)という字がよく見られる。普通は「送人情」側の名前と金額の下に付いている。それは「人情」が還されたことを意味する。

「退」は二つの場合が考えられる。一つは上にも述べた、祖父母輩から送ってきた「人情」を還したことを意味する。もう一つの場合は、「送人情」側とこれから付き合い気持ちがないから還したということの意味する。その理由は

「人情」往来がずっとなかったのに、突然贈ってきて、困るから還した。
これから付き合い気持ちがないから、還した。
相手の経済事情が悪いのを知っているから、還した。でも、人情簿には記入した。

事例：1997年3月、黄さんの息子が結婚する時、黄さんはその前夜、親友の薛さんに五千元を渡し、買い物担当を頼んだ。しかし、翌日になって、薛さん一家が五千元を持って夜逃げしたことを知った。黄さんは五千元が騙されたにもかかわらず、薛さんの親戚を通して、薛さんから貰った500元の「人情」を還した。

結び：この度の調査に当たり、国营工場の工人を中心に、「人情簿」を集めてきた。彼らは三十年余りに同じ工場で働き、個人的ネットワークも社会主義工場というコミュニティーにおいて展開してきた。しかし、「同志」関係が重要視される時代でも、人生儀礼において、親族との間に、昔ながらのやり方でやり通してきた。

現在では、「同志」という言葉があまり聞こえなくなった。国营企業の株式化につれて、これからの「同志」関係が変容して行くこと推測できよう。丹城鎮の若者の間には、上海や重慶などの大都市に出て、建築業の分野で成功した後、兄弟姉妹や従兄弟などを上海や重慶などへ呼んで来て、家族経営の形で企業を興

す人もいる。いまの社会転換期において、同級生、親族、同郷など血縁、地縁関係をうまく利用できるかどうか、事業成功の鍵になるかもしれない。

参考文献：

日本語文献

滋賀秀三

1967 『中国家族法の原理』 東京：創文社

植野弘子

1987 「妻の父と母の兄弟 台湾漢人社会における姻戚関係の展開に関する事例分析」 『民族学研究』51 巻4号 東京：日本民族学会

2000 『台湾漢民族の姻戚』 東京：風響社

中国語文献

費孝通

1947 『郷土中国』 上海：観察社

閻雲翔

2000 『礼物的流動 一個中国村莊的互惠原則与社会網絡』李放春、劉瑜訳
上海人民出版社

象山縣民間文学集成 办公室編

1989 『中国民間故事集成 浙江省象山縣卷』

象山縣誌編纂委員会編

1988 『象山縣誌』 浙江省：浙江人民出版社

象山県統計局 内部資料

1991~1995 象山統計年鑑

1996 象山統計年鑑

1997 象山統計年鑑

1998 象山統計年鑑

1999 象山統計年鑑

毛品豪

1991 『象山人口分析』 内部資料

賀正瀾編

1998 『海 村誌』 海 村誌編纂領導小組編 浙江省象山縣：内部資料

伊極才

1993 『伊家村誌』 浙江省象山縣：象山縣第一印刷廠

東陳村誌編纂委員会編

1999 『東陳村誌』 浙江省象山縣：象山縣機關印刷廠